

聖書：コリント人への手紙第一 7：17～24

説教題：召されたときのままの状態

日時：2022年6月19日（朝拝）

パウロは7章に入って、コリント教会から届いた手紙に答える形で、結婚について、独身について、離婚について、再婚について語って来ました。しかし今日の箇所にはこれらの言葉が出て来ません。ということは話は新しいテーマに移ったのかと一瞬思われるかもしれませんが、次回の25節は「未婚の人たちについて」と始まり、なお結婚のテーマに関する話が続いていることが分かります。では今日の箇所はどういう意味を持っているのでしょうか。パウロはここで、この7章のメッセージの根底にある原理について述べていると考えられます。色々なケースにおいてクリスチャンはどうあるべきか、彼は細かく語っていますが、それらに共通する基本原理は何なのか、どういう視点でパウロはこれらの言葉を語っているのか、それを明らかにしてくれる部分となっています。

17節：「ただ、それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態です。私はすべての教会に、そのように命じています。」コリント人たちはこの時、どんな考えを持っていたのでしょうか。1節で見ましたように、彼らの手紙には「男が女に触れないのは良いことだ」と書いてありました。彼らは結婚関係にある者たちであっても性的関係は持たない方が良いのではないかと肉体的な関わりを断つことによって、より霊的に進歩・成熟した人間になることができるのではないかと考えていたようです。そこから、離婚する方が良いのではないかとこの考えも出て来たようでした。そんな彼らにパウロは10節と11節で「妻は夫と別れてはいけません」「夫は妻と離婚してはいけません」と言いました。その命令の根底にある原理がこの17節に示されています。すなわち「それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態です」ということです。パウロが言いたいことは、今与えられている環境や立場を変えたり、それを捨てることによって、より霊的な人間になれるかのように考えるべきではないということです。外側のことを変えて霊的な人になろうとすべきではなく、目指すべきは自分自身の変革です。そしてそれは今与えられている状況においてできるということです。その人はそこで生きるようにとその場に置かれているのだから、まずはそこで主に対して忠実に歩むことを目指すべきである。安易に今の立場を変えれば、それで

霊的な人になれるかのような幻想を抱いてはならないということです。ですから結婚している人は離婚すべきでないと言われました。

また 12～16 節で見た、片方のみがクリスチャンの夫婦についても同じです。前回見ましたように、これはクリスチャンがノンクリスチャンと結婚したというケースではありません。片方が信者で片方が信者でない夫婦として考えられている唯一のケースは結婚後に片方が信仰を持ったというケースです。そういう人々の中には結婚相手が信仰者ではないため、離婚する方が良いのか、その方が聖く歩むことになるのではないかと考える人たちがいたようです。これに対するパウロの答えも同じでした。状況や環境といった外側のことを変えることによって霊的な人間になれると考え、それを実行してはならない。その人は二人とも信者ではない結婚生活を送っている中で、片方が主への信仰に導かれました。その人に対する主の御心は、すでにある結婚関係を壊すということではありません。その人はその状況で救いへと召されたのですから、その「召されたときのままの状態」歩むべきです。その御心を受け止めて、今置かれている場所で福音に真摯に生きることを自らの課題とすべきである。パウロは「私はすべての教会において、そのように命じている」と言っています。

さてこれは結婚だけではなく、他のすべての事柄にも当てはまる原則であることを、パウロは二つの例をあげて示して行きます。一つ目は割礼を巡る問題です。18～19 節に割礼を受けている人と受けていない人が出て来ます。割礼を受けている人とは基本的にはユダヤ人のことで、それを受けていない人とは異邦人のことと言えます。コリント教会もユダヤ人と異邦人の両方からなる教会だったのでしょう。そしてその中には割礼を受けているが、そのしるしがない方が良いと考える人たちがいたようです。また逆に割礼を受けていないが、それを受けたいと思う人たちがいたようです。そんな彼らに対してパウロは「召された時、どうだったか」と問います。ある人は割礼のしるしを持った状態で救われました。またある人は割礼のしるしを持たない状態で救われました。彼らはそれがどうであるかにはかかわらず、ただ恵みにより、主への信仰を通して救われました。ですから今からそれらの形を変えることによって、より霊的な人間になれるかのように考えてはならないということです。それはどっちでも良いことです。そういう意味で割礼は取るに足りないことであり、無割礼も取るに足りないことです。「重要なのは神の命令を守ることです」とパウロは言います。割礼を受けていた人も、割礼を受けていなかった人も、そのまま神に受け入れられたのです。

から、その違いは気にする必要はありません。そういった見てくれを変えることよりも重要なことは、どう生きるのかです。神の命令を守って生きることです。そちらにこそ関心を注ぎ、自らの生き方の変革こそを願い求めるべきです。パウロは 20 節で「それぞれ自分が召されたときの状態にとどまっていなさい」と繰り返します。

しかしこのことは、救われた時の状況を一切変えてはならないという意味ではありません。割礼について言えば次のことが参考になります。パウロはテトスには決して割礼を受けさせませんでした。ガラテヤ人への手紙 2 章 3～5 節に記されていますように、それは福音の真理を守るためです。救われるためには割礼を受けることが必要だという主張のあるところでは彼は妥協しませんでした。一方、使徒の働き 16 章 3 節を見ると、パウロはテモテを伝道旅行に連れて行く際、彼に割礼を受けさせたと記されています。これは便宜的な理由によります。割礼を受けておく方が福音の働きのために都合が良かったからです。それを受けたところで罪を犯すわけではありません。ただ要らぬ妨げを前もって取り除くためです。このように、召された時に割礼を受けていなかった人が後になって受けたというケースがパウロの周りでもありました。ですからこれは絶対禁止命令ではないのです。パウロが言いたいことは、このしるしを身に帯びることによって、あるいはその跡を消すことによって、それでより霊的な人になろうと考えるのは誤りであるということです。あなたは今置かれている場で信仰者として十二分な生き方ができる。外形的なことに囚われるのではなく、今与えられている状況で神の御言葉に従い、神の命令を守る生活に向かうことに関心を向けるべきであるというのがパウロの言いたいことです。

二つ目の例は奴隷と自由人です。21 節前半に「あなたが奴隷の状態に召されたのなら、そのことを気にしてはいけません」とあります。クリスチャンの奴隷は、その状態で救われ、神に受け入れられました。ですからその状態で、その後も生きることができます。その状態を恥ずかしく思う必要はありませんし、そのために信仰者としての地位が劣っていると考える必要もありません。しかし 21 節後半でパウロは「もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう」と言います。ここからも召されたときの状態から決して動いてはならないとパウロが命じているわけではないことが分かります。自由の身になれるならなっているのです。それはその方が好ましいからです。人間としての本来の状態に近いからでしょう。私たちはここに奴隷制度に対するパウロの態度を見て取ることができます。彼は聖書から見て奴隷制度が正

しくないからと言って、すぐに全部をひっくり返そうとはしませんでした。力づくで外側から制度を変えようと凶つても決してうまくは行きません。当時の奴隷制度は今日私たちが想像する奴隷の状態とかなり異なっていたということもあるでしょう。当時の奴隷は主人と良い関係を持ち、主人に多くを任せられ、栄えある地位や働きにもついていました。必ずしも非人道的な扱いを受けていたわけではありません。パウロはそんな当時において、もし自由になれるなら、その機会を用いたら良いと言います。しかし急いで外側の制度を変えたり、それを壊すより、そこでも十分に信仰者として生きることは可能であると言います。むしろその状態であなたは救われたのだから、まずはそこで主への信仰に生きるべきである。そしてその人のそこでの生き方が周りにインパクトを与えて、やがて外側の制度もより正しい方向へ変えられて行くことを求めるという方針をとったのです。

22 節に「主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです」とあります。召された奴隷は外形的には奴隷ですが、その内側は主にある自由に生きている自由人です。一方、自由人は外形的には自由な人ですが、その内側はキリストにのみ忠誠を尽くし、キリストを主とする奴隷です。どちらも神の前で大きな本質的な差はありません。23 節に「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となつてはいけません。」とあります。すでに 6 章 20 節で同じことが語られました。この代価とは言うまでもなくキリストが十字架上で払われた犠牲のことです。彼らはこの代価を通して自由な者へと買い取られた者たちです。またそれは主のものとして買い取られたという意味で、キリストへの奴隷となるよう買い取られた者たちとも言えます。この両方のイメージが当てはまります。ですから「人間の奴隷となつてはいけません」と言われます。外側のことや目に見える人間関係に縛られる者になつてはならないということです。信仰者となることによって与えられた主にある新しい身分、霊的な立場こそを心に留めて、それぞれが置かれた場で「主に属する自由人」また「キリストに対する奴隷」としての歩みをせよ！とパウロは言います。

こうして最後の 24 節でもう一度、今日の箇所メインポイントが確認されます。「兄弟たち、それぞれ召されたときのままの状態、神の御前にいなさい。」ここで新しく加えられているのは「神の御前に」という言葉です。これは「神の傍らに」とか「神のそばに」という意味の言葉です。救われた者たちは、ただ召されたときの状

態にとどまるのではなく、そこに「神とともに」とどまるのです。そこには神がともにいてくださるのです。その神と一緒にそこで生活するのです。私たちはその神の御前で、神とともに歩むことができるのですし、そうしてそこを神の臨在と恵みがあふれる場所へと変革していくことができるのです。

私たちは時に「今の自分の環境が違っていたら、もっと良く成長できるだろうに」とか、「自分がなかなか理想的な生き方ができないのは、自分が今、置かれている状況のせいだ」などと思ったりするかもしれません。そして「この際、大きく今の状況を変えて、生活環境をガラッと変えて、ここから脱却することによって、より霊的で信仰的な歩みをする者へと飛翔できるのではないか」と考えるかもしれません。しかしパウロはそうでないと言っています。私たちはそのように思い悩む必要はないのです。私たちすべての者にとってのチャレンジは、私たちがそれぞれどんな場に今あろうとも、そこで神に従って霊的に成長し、神に祝される歩みに進むことができるということです。むしろ神はそこでそのように歩むようにと、私たちを今ある場所に導いてくださっていると考えられます。そこもいつも神の御前にある場所であり、私たちがいつも神とともに歩むことができる場所です。私たちは自分がどこに置かれているとしても、そこで神の命令を守り、神に感謝をささげる生活をすることができます。そしてそこを神の恵みがあふれる場所とすることによって、そこで私たちに召してくださった神にお答えする歩みをささげて行く者となることができるのです。